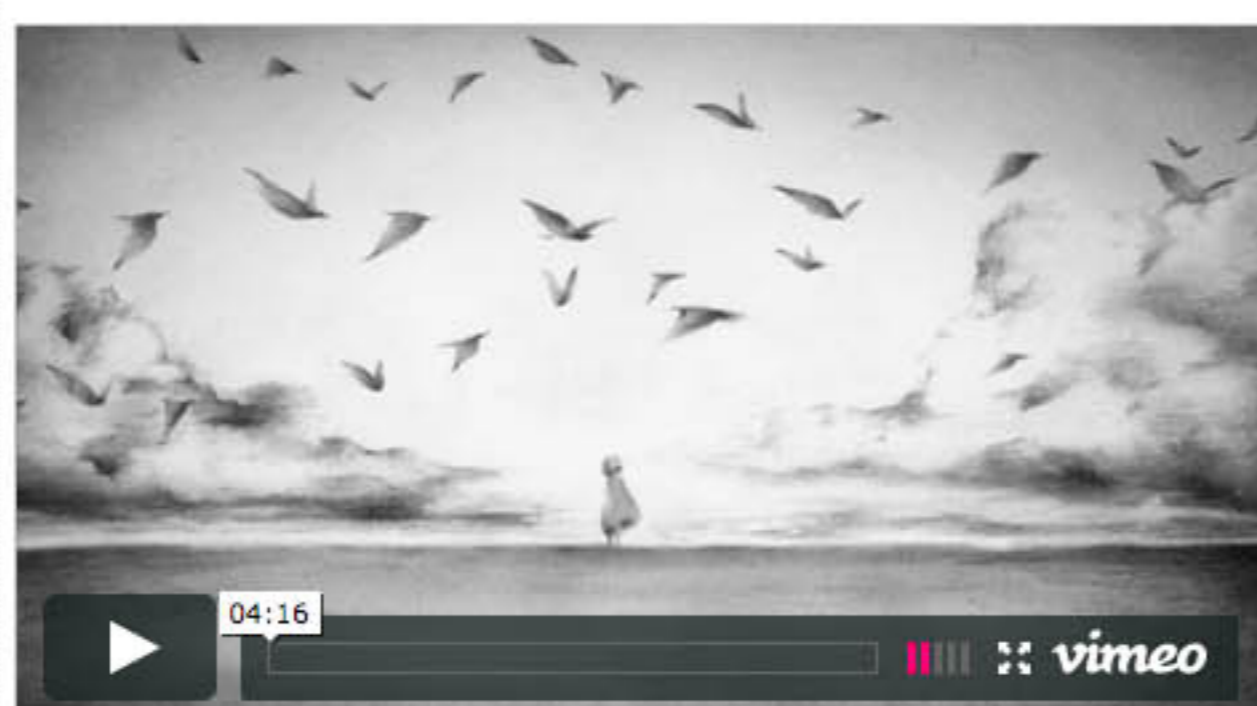


移ろい変わりゆくものと、確かにそこに在るもの。武蔵美卒の気鋭アニメーション作家 / 木版画家 中村綾花による、ゆゆはるかMV「砂漠の夜の夢」

2015.01.09 Fri

PICK UP

INTERVIEW



ゆゆはるか「砂漠の夜の夢」
dir: 中村綾花

広大な砂漠に佇む、大人なのか子供なのか、性別さえも分からない、一人の人物。風にマントをなびかせて、少しも動くことなく、ただそこに立ち続ける。その一方で、その人物が立つ大地は、砂漠から木が生えたり、吹雪になったりと、めまぐるしくその姿を変えてゆく。

幻想的で美しく、そして力強いエネルギーを感じさせるこの手描きアニメーション作品は、シンガーソングライターゆゆはるかのミュージックビデオ (MV) 「砂漠の夜の夢」。2013年に武蔵野美術大学を卒業したばかりの若きアニメーション作家 / 木版画家である中村綾花氏の手掛けた作品だ。中村氏が高校を卒業した頃、路上ライブをしていたゆゆはるかを知り合い、その縁から今回のMVを依頼されたのだという。

■ 大切にしているのは、音楽の空気感



思いついたカットをメモした創作ノート。
※画像クリックで拡大します。

「砂漠の夜の夢」は、ゆゆはるかが、サン＝テグジュペリ「星の王子さま」の一文「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠しているからだよ」からインスピレーションを受け、「自分が求めている大切なものは、本当は自分が持っている」というメッセージを込めて歌った楽曲。中村氏は、この楽曲に対して、ストーリーよりも空気感を重視してアニメーションを制作していった。

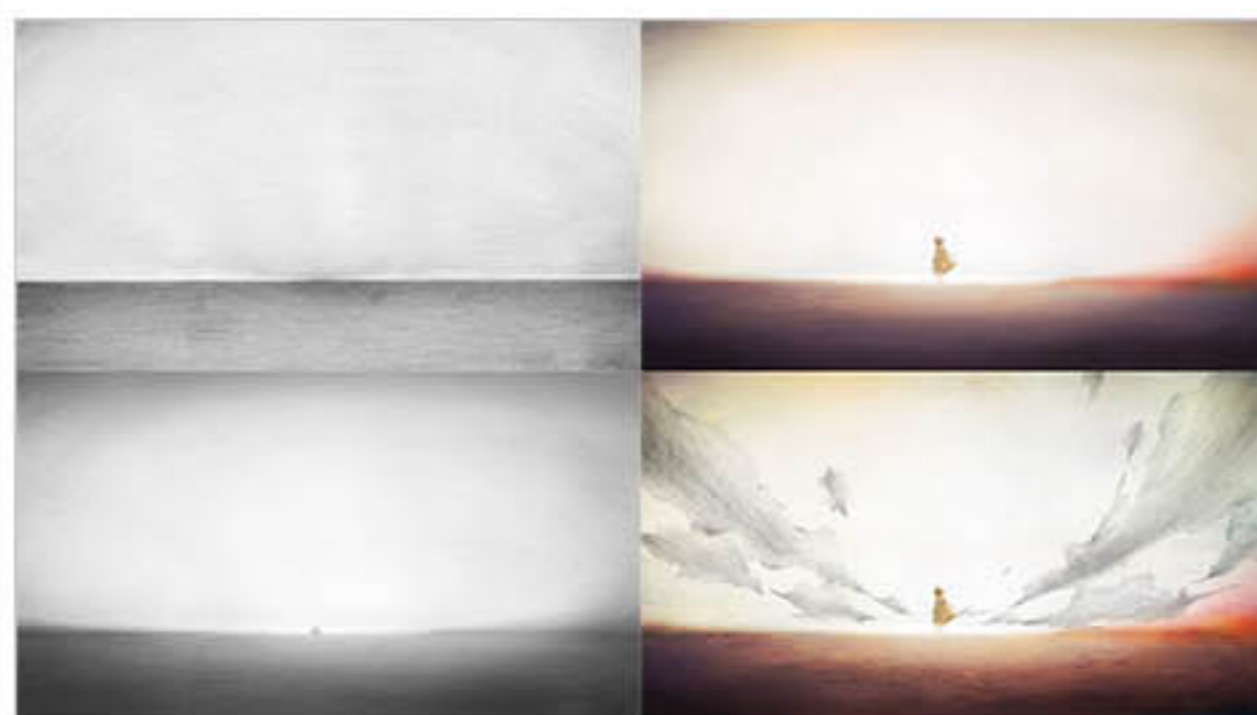
「映像では、“移ろい変わりゆくものと、確かにそこに在るもの”を表現しようと思いました。中央にいるのは、見る人それぞれの“自分の中の大切なもの”をイメージしています。どんどん変化していく人や物の動きの中で忘れてしまいそうになるけれど、ちゃんとそこにあるんだよって。それは記憶だったり、信念だったり……。自分の支えになるものがどこかにあって、普段は気にもしないけれど、それは常に自分を見てくれている。なので、中央にいるものがこの映像を見ている人を見ている、というように作りました。

最終的にカメラが動くのですが、それは色々な生き物の視点を意識しています。空を見上げたり、草むらを掻き分けたり、飛んだり……。それで最後は自分に戻って、忘れていた何か（大切なもの）にぶつかる。自分の中に戻っていくんです」（中村氏）

「砂漠の夜の夢」に限らず、MVを作る時はいつも「曲の雰囲気そのまま映像に出来ないか」と意識する中村氏は、曲を聴く時も歌詞を頭に入れすぎないようにしている。言葉だけの“詩”ではなく、音に乗せた“音楽”である以上、それを尊重し、表現されたものを掴んで視覚化させたいと考えているそうだ。

本作でも曲が生み出す空気をひたすら探り、追い掛けて、映像化しており、次々と変化する砂漠からは大地のダイナミックな存在感を感じさせる。空気感を大切にすることで、“見る”のではなく“感じる”作品を目指している。

■ 実写素材も重ねて作る、カラーの世界



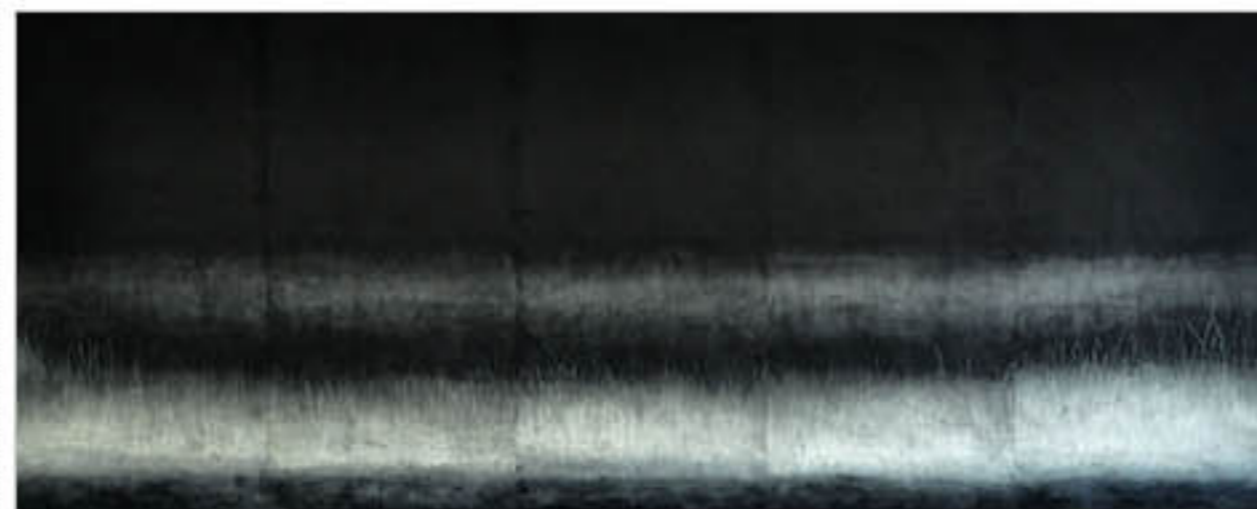
「砂漠の夜の夢」メイキング。鉛筆画からデジタルでコンピュータに取り込んで着彩、それぞれのアニメーションをレイヤーで重ねて行く過程。
※画像クリックで拡大します。

色彩のないモノクロの映像がサビに入ると淡く色づき、音と共に世界観が広がってゆく「砂漠の夜の夢」。

「モノクロからカラーへ移り変わるタイミングで世界観が広がっていくようにと意図しています。最初のサビでモノクロからカラーに移り変わる瞬間は、個人的に最も上手くいった表現です。ここでは、電車に乗っていた時に窓から光を撮影した映像を重ねているのですが、電車に入り込む光は、建物などでバタバタ遮られるので、その動きと形が今回上手く合ったかなと思っています」（中村氏）

制作期間は、約3ヶ月半。たった一人、部屋に引きこもって、鉛筆で描いた絵を取り込んでPhotoshopで着彩し、AfterEffectsで編集してアニメーションを作っていた。また、光や水など動きを撮った動画や写真を重ねて、動きと色味に厚みを持たせたり、デジタルの着彩を色鉛筆らしく見えるように色味と画面を作り込んでいる。

■ 映像だけじゃない！ 木版画も手掛ける、若きアーティスト



(上) 中村氏による木版画作品「先」。(2500×6000 / 2013年)。
※画像クリックで拡大します
(下) 「先」の制作風景。

武蔵野美術大学では木版画を専攻しながら、映像制作においてアニメーション作家のアシスタントをしたり、制作会社でアルバイトをして学んでいたという中村氏。2013年に卒業してからは、MVやTV番組のアニメーション、イラストを制作しつつ、木版画家としても活動している。そんな彼女が映像制作を始めたのは、2010年に観た、とある映画がきっかけだったという。

「趙 暉 (チャオ・イエ) 監督の「ジャライノール」を観た時、その画の強さに衝撃を受けました。内モンゴルが舞台なのですが、この映画を観た足ですぐに撮影機器を買いに行き、その夏にはモンゴルに行って馬と草原を駆け巡りました。描くことが好きなので、実写ではなくアニメーションを作るようになりましたが、「ジャライノール」は映像を始めるきっかけになりました。描く空気感や風は、モンゴルでの体験が大きいです」（中村氏）

現在、中村氏は、いくつか予定されている展示用の木版画の制作をしながら、もっと版画のテイストが映像に活かせるか考えている。今後は「風が吹くように、ザア……ッ！ と大きく動いて、画面から空間を生み出すような」映像を作りたいという彼女がこれまでに手掛けた作品は、公式サイトに公開されているので、ぜひ一度ご覧になってみてほしい！



Tags: [MV](#) [ゆゆはるか](#) [中村綾花](#)

トラックバックURL:<http://white-screen.jp/white/wp-trackback.php?p=46356>

PREV NEXT